

# 文部科学時報

文部科学省 編集 特集 ● 国立大学の法人化 1年を振り返って

巻頭言 佐々木毅 随想 有馬朗人 特別寄稿 野依良治  
論文 清水建宇／竹原敬二／橋本康男／山野井昭雄／生駒俊明  
座談会 相澤益男／天野郁夫／滝 紀子／清水孝悦

平成17年  
No.1547

# 2

●特別記事 学校施設のバリアフリー化等の推進について



# 社会の「員」としての大学へ

広島大学地域連携センター教授

橋本康男

広島大学では、四年前に全国で初めて社会との窓口役の専任教員組織を設置した。その立ち上げに参加し、「産学連携」と「社会貢献」だけではない、大学と社会との連携の可能性開発に具体的に取り組んできた者として、その経験を述べたい。なお、本稿の内容はすべて個人的な感想・意見である。

## 社会連携という言葉

教育とは縁のない世界から大学に移った私は、当時使われていた「社会貢献」という言葉に違和感があり、それに代えて「社会連携」を提唱した。大学の知の一方的提供ではなく、大学と社会との双方向でのかかわりによる、大学自身の変化と両者の発展という意識を盛り込みたかったからだ。この「社会連携」という言葉は、本学では、国立大学法人化を機に「社会連携推進機構」が設置され、一定の

認知がなされた。

## 社会連携の意義

当初私は、この社会連携という言葉を上記の大学としてスタートした国立大学が、社会の中の大学として発展していくことだと説明していた。二一世紀の日本において、人と社会について根源的に考え、持続的に研究を蓄積していく、そして人を育てる場としての大学には、現実の社会に軸足を置き、そのダイナミズムと必然性の中で知の価値を発揮させる存在であってほしいという期待があったからだ。「事件は常に現場で起きている」のであり、「知」が社会とのかかわりを持たなければ、その価値と迫力も社会に伝わりにくいのではないかという思いである。社会が大学に求めているのは、「お人好しの一方的なサービス」ではなく、大学本来の使命である教育・

研究において、社会との関係を深めその責任を果たしていくことである。

## 学内連携と組織的・継続的連携

社会連携の模索に当たっては、人的制約もあり、まず成功事例を生み出すことに重点を置いた。理屈だけではなく、実際にやってみなければ問題点も分からない。ここでは、「学内での横断的な連携」と、「社会との組織的・継続的な連携」を重視した。大学には個人商店の集合体的な性格があるが、学際的な連携活動や、社会的存在としての大学の立場を生かした活動にも、大きな可能性があると思っている。また、できるだけ地域の資金を活用することを大切にしたい。一方的な貢献ではなく、その活動に対しての地域からの価値評価に基づいた連携が大切だと考えたからだ。

## 社会連携の事業例

このような観点から取り組んだ例として、地元のマツダ財団との連携により幼小中高大の教員等の議論から生まれた複合的な科学教育事業である「科学わくわくプロジェクト」や、地域の経済団体との共同研究方式により学内の多様な領域の教員の参加を得て取り組んだ産業振興ビジョン等の策定、行政との共同研究としての犯罪減少のための複合的な実



はしもと・やすお 広島県出身。1976年広島県庁。商社出向、シンガポール駐在、国際交流財団出向のほか、人事・企画・産業振興・地域医療等を経験し、2001年広島大学助教授、04年より現職。

証研究の構築、地域からの提案について大学の資金で研究する制度を活用しての、障害者作業所支援や外国人子弟日本語教育支援システムの共同研究などがある。

これらの事業には、学内の多様な部局の教員が、それぞれの専門分野を生かして参加している。通常の研究活動においては自然発生的には生まれない学際的な協力が、社会のニーズをきっかけとして生まれている。社会科学系の教員の参加が多いことも特徴である。

また、大学の持つ社会的信用と専門性を背景とした、小中高大の教員など地域の科学教育にかかわる関係者のネットワークづくりや、行政や経済団体等の議論の場づくりなどにも手ごたえを感じるとともに、地域の実践者・組織と大学の研究者との共同作業にも大きな可能性を感じている。

### 専門家を生かす専門職

今後は、このような社会連携活動をどう安定的・継続的に発展させていくかが問われている。それにはコーディネーター役を担える組織の役割が大きいと思うが、同時に組織づくりよりもむしろそれを担う者の確保と活用の問題のようにも感じている。社会連携分野では、大学の社会的使命について高い目的志

向性を持ち、自分の業績を誇るのではなく、学内の専門家の力を引き出し社会と結びつける新たなシステム構築のできる人材が求められている。

大学では、産学連携、留学生支援、入試、就職、情報などさまざまな分野で専門「業務」を担う「教員」が増加しているが、そのような部門での業務と研究の関係や業績評価などの処遇の在り方、適切な人材の確保策などが問われている。

### 社会の一員として

以上、私が直接かかわった活動を中心に私見を述べた。私自身は二〇〇四年度末で大学を離れることにしたが、手本のない今の時代においては、大学には人と社会の原点を見つめる知の拠点として、科学の真理追究の場としての役割がさらに高まっていくと思う。知は、現実の社会とのかかわりの中でその輝きを増すし深まってもいく。継続教育などのかたちで大学と社会とのかかわりもさらに拡大していくだろう。人の社会のありたい姿の実現のために、大学が社会の一員として社会とともに発展していくことを心から期待している。

## CONTENTS

### 特集 国立大学の法人化 1年を振り返って

巻頭言	10	国立大学の法人化 ●佐々木毅
随想	11	国立大学法人の成功と発展のために ●有馬朗人
特別寄稿	12	国立大学法人への期待と教育研究評価の視点 ●野依良治
座談会	16	国立大学の法人化 ●(出席者) 相澤益男/天野郁夫/滝 紀子/ (司会) 清木孝悦
事例紹介 1	28	財務から見た筑波大学の法人化 ●筑波大学
事例紹介 2	29	東京大学の産学連携 ●東京大学
事例紹介 3	30	信州大学環境マインドプロジェクト ●信州大学
事例紹介 4	31	グラデュエーションポリシーの確立と実施 ●山口大学
事例紹介 5	32	工科大学構想に基づく名工大の改革 ●名古屋工業大学
事例紹介 6	33	九州大学の学部横断「21世紀プログラム」 ●九州大学
事例紹介 7	34	学生支援の充実に向けて ●新潟大学
事例紹介 8	35	実学の風土と産学連携 ●小樽商科大学
事例紹介 9	36	一橋大学における学術研究の推進 ●一橋大学
事例紹介 10	37	「食の安全・安心確保」に向けた帯広畜産大学の取組 ●帯広畜産大学
事例紹介 11	38	地域社会と一衣帯水の関係に ●鳥取大学
事例紹介 12	39	世界を視野に、地域から始めよう ●宮崎大学
論文 1	40	国公私立を問わず大学活性化への期待がある ●清水建宇
論文 2	42	学びインパクトとモチベーションリソース革命 ●竹原敬二
論文 3	44	社会の一員としての大学へ ●橋本康男
論文 4	46	マインドと体制の変革で、たくましい前進を期待 ●山野井昭雄
論文 5	48	(私版)高等教育のグランドデザイン ●生駒俊明

### 特別記事 学校施設のバリアフリー化等の推進について

50	学校施設のバリアフリー化等の推進に関する施策について ●大臣官房文教施設企画部施設企画課
56	学校現場からみたバリアフリー化 ●成田幸夫
58	学校施設のバリアフリー化とノーマライゼーションへの道 ●上野 淳

84 編集後記

78 報告

76 海外最新情報

74 S.P.P.事業全国巡り

● 科学技術・理科大好きプラン最新線

● 蒜山原の珪藻土層と火山灰層

― 鳥取県立青谷高等学校 ―

72 科学技術のフロンティア

● 雪氷災害回避軽減のための降雪予測

70 大学共同利用機関法人

学術研究のダイナミックで総合的な発展を目指して

● 情報・システム研究機構について(1)

68 自分大好き体験!

● 国立大雪青年の家

66 地域発!使ってみよう エル・ネット

● 「いわて学講座」

60 焦点―文教・科学技術施策

● 生徒指導上の諸問題の現状について

8 インフォメーション

● ラサール石井

6 あのひとにこのはなし

#### カラー

- 1 あたらしい学舎(まなびや)Part II
- 東京都立六郷工科高等学校
- 表2 温故知新 ● 今城塚古墳
- 表3 温故知新
- エアロゾル観測用係留気球